

能にすることができる。そればかりか、遺伝子の混ぜ合わせの際に一定の比率でおこる変異によって、種の多様性をもたらす進化を促進することになる。ヒトの場合、23対の染色体を持っているので、2の23乗、約840万種の精子や卵子が作られる。さらに受精により840万×840万=70兆以上の異なる遺伝子のセットが一組の両親から生れる可能性があるのだ。

一つの原始細胞から始まった「いのち」の伝達は、今や3000万から1億くらいの種の「生きもの」に進化、多様化した。私達ヒトもその1種にすぎない。

伊藤明夫 著「40億年、いのちの旅」2018年 岩波書店

ゲノム、DNA、遺伝子、染色体

よく耳にするがこれらはどう違うのか。頭の整理をしておく。私達の体は数十兆個の細胞でできている。これらの細胞は、一部を除いて常に再生されている。細胞の生死が繰り返されているのだ。再生される際の「設計図」が遺伝子だ。遺伝子には体を構成する「タンパク質の構造」とそれが「作られるタイミング」が記録されている。設計図を記録している「文字」にあたるのがDNA。その総体がゲノムだ。ゲノムは、その生物一固体を作るために必要な遺伝子の最小限の単位のセットをさす。染色体は、この遺伝子が格納された入れ物のようなものだ。

分子生物学からみた「Y染色体」

生化学者の福岡伸一さんが、「できそこないの男たち」でこの20年ほどの分析生物学の歩みを紹介してくれている。性分化、Y染色体に対する議論は面白い。

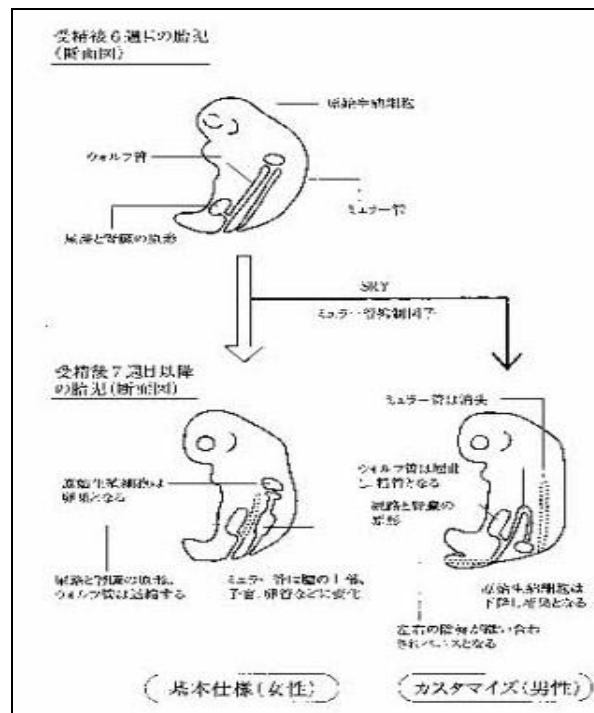
「アダムからイブ」が作られたのではない

イブからアダムが作られたのだ

福岡さんは、「生物の基本形はメス」だ「オスは使い走り」にすぎないと論じている。

・・・地球が誕生したのが46億年前。そこから最初の生命が発生するまでにおよそ10億年が

経過した。そして生命が現れてからさらに10億年、この間、生物の性は単一で、すべてがメスだった。・・・<生命の基本仕様>—それは女である。本来、すべての生物はまずメスとして発生する。メスは太くて強い縦糸であり、オスは、メスの系譜を時々橋渡しし、細い横糸の役割を果たす“使い走り”に過ぎない。アダムはイブから作られたのだ。



基本仕様、それはメス

・・・すべての胎児は染色体の型に関係なく、受精後約7週目までは同じ道を行く、生命の基本仕様、それは女である。このあと基本仕様のプログラム進行に何ら干渉が働くことがなければ、割れ目は立派な女性の生殖器となる。まず割れ目から細い陥入路が奥へと伸びる。これはミューラー管と呼ばれ、細胞分化によって、入り口部分は陰に、その奥は、子宮、卵管となる。卵管の奥に鎮座する原生殖細胞は、卵巣となる。男子の場合は、この割れ目が閉じ合わされる。肛門からペニスの裏側まで続く縫い合わせのような筋（俗称“蟻の門渡り”）がその痕跡だ。

男子は自分の体を見て不思議に思うことがある。

それは陰ノウから肛門にかけての一筋の縫い目だ。小学生の頃これに気付いて手術の跡？と思いつつも誰にも聞けず悩んだことがある。そして生殖の仕組みを知った中学生時代、今度は精子が尿と同じ場所から出ること疑問をいだいた。生殖という大切な機能が排泄と同じ器官を使っているからだ。男の体は、女のからだから改造される際、有り合わせの部品ですまされていたのだ。

男は女に比べて弱い

メスの基本仕様を改造して作られたオス。ガンの発生率も高く、免疫機能もメスに比べて低いという。男性は生涯にわたって男性ホルモンであるテストステロンを浴び続ける。これが男を男たらしめるのだが、同時に免疫系を傷つけ続ける。日本における平均寿命は女子の方が男子より長い。男の方が寿命が短いのは、この生物学的な弱さが大きな要因になっているようだ。どんなに威張っていても男は弱いのだ。

チンギス・ハーンの痕跡

「Y染色体の価値」を考える上で面白い研究結果が紹介されている。

アジア16地域(中国東北部から東はウズベキスタン、中央アジアのアフガニスタンに至る広大な地域)の2,123人の男性のY染色体の分析だ。92%は雑多な多型性。8%の男性はほとんど同じ多型性を共有していたと言うのだ。この地域の男性数は2億人。8%だと1,600万人となる。すなわち1,600万人が同一にして単一の男系祖先を持ちうる可能性がある。

この広大な地域は800年程前、かつてチンギス・ハーンの軍団が馬と弓をもって席捲した地域と重なる。この8%、1,600万人は、ハーンのY染色体をまき散らした痕跡ではないかと。

オスの役割、母の遺伝子を

ヒトは、23対、計46本の染色体を持つ。そ

のうちの小さな1本がY染色体。ハーンの末裔1,600万人は、同じY染色体を1本持っている。しかし彼らの残りの45本の染色体は？それはハーンが運んだ積み荷。積み荷は入れ代わり続けた。今や、二人として同じ組み合わせ、同一配列の45本を共有するものはいない。

染色体を半分に分け、それを別の場所に運び、もう半数に混合して合体すること、それを再び二つに分け、別の場所に運ぶこと。大なる混合と変化、その間、確かにY染色体は変わらなかった。男の本質は「使い走り」だ。Y染色体は神器ではなくナノスケールの屋号、飛脚の印だ。Y染色体のできる唯一の営み、それは母の遺伝子を別の娘のもとに運び、混ぜ合わせることなのだ。

福岡伸一 著「できそこないの男たち」2008年 光文社

不敬な「Y染色体」論

「万世一系」男系こそ日本そのもの。連綿と繋がれてきた「Y染色体」にこそ価値があると強面に主張する人たち。

しかしこれほど不敬なことではない。母体の卵子には「Y染色体」は存在しない。あるのは父の精子の中。男子が産まれないとは、父の「だらしのないY染色体を非難していることなのだ。

天照大神は女性だ。日本においては双系(母系、男系の混在)が普通だった。中国から輸入された仏教や儒教の影響で支配階級においては「男系」「男尊女卑」の価値観が広がったが、庶民の観では「おっかあ」はまだまだ強かった。明治維新の際、列強の一員となるべく富国強兵を急いだ明治政府は、西欧列強にならぬ急ごしらえで「絶対神」を捏造した。70数年前までの軍国日本では、学校教育と軍隊において、ビンタをはって「Y染色体の価値観」をたたき込んでいた。セクハラおやじは、このゾンビ達に汚染された者達が多い。

「平和国家」「男女平等」の日本社会は、今こそ「Y染色体」信仰から脱却したいものだ。